

学 位 論 文 要 旨

氏 名 西丸純子

題 目 青年期の深い鑑賞体験における言語と身体の関係についての研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、国語教師村上通哉による日本画家東山魁夷との交流を創った実践、筆者による彫刻家安藤榮作を招いた実践を検証し、表象を介して深い体験を伝え合う創作者と青年期の生徒の実際の様相を明らかにする。「青年期」とは自己の分節化に悩む時期であり、分節される前の自己を還元的に自覚する「対話」が重要であると考えた。その意義は、美術科における広義での言語活動の充実に位置付けられ、自己や他者の尊厳を自覚する教科内容に資するものである。

第1章では、身体と身体を持つ本源的な「対話」から、＜私的世界＞の成立までを概観した。

第2章では、深い鑑賞体験と同意の「美的体験」の享受について金子の述べる「作者が作品中に設定・体験したイメージの論理に沿って、鑑賞者も体験する」を「追創作」と定義し、検証した。その際、「美的体験」を創作と享受する側から分析したハルトマンの論を用いた。ハルトマンは、芸術を実在的な前景と非実在的な背景の二層に分け、さらに背景にも奥ゆきがあるとし第Ⅰに物的、第Ⅱに生命性、第Ⅲに心的、第Ⅳに普遍的な層（精神的な層）の多層性を示した。これらの層は、創作者と鑑賞者の「精神的同質性」によって異なる現れ方を示す。以上の理論と照らし、第3、4章では、創作者と鑑賞者の身体と身体がいかなる層で重なり合うのか、また背景層を現象させる「精神的同質性」の実際の様相を追った。

第3章では、中学生を対象に東山の水墨画を題材にした村上の実践を取り上げた。村上の実践は村上自身の青年期における深い鑑賞体験に基づいていた。その鑑賞は、誰もが知る前景層の知覚から精神的な層へ接続した体験であり、鑑賞を通して＜声＝情動の世界＞の主を同型的な存在として立ち上げ、＜ことば＞が敷き写された。こうした村上の体験に裏付けられた実践は以下、段階的な四つの対話構造を経るものであった。

手紙により i) 自らの思いを伝え合う対話では、作品から受けた実感を、手紙という志向性を持つ媒体で伝え合った。

東山の文章による ii) の作家の視点と重ねあわせ追体験する対話では、文中に登場する「花」や「月」への視点移動、「花になる」「月になる」という対象への同化により、幻想的な世界に没入した後、第三者として観る作家の視点と重なり、前景に引き戻された。

東山の直筆による iii) の作家の直接的な身体性が鑑賞者側に浸透する対話では、筆圧や筆勢・間・息遣いなどの直接的な身体性が敷き写された。

東山の水墨画を観る体験では、iv) の多様な視点の移動と重層化により、対象と同化した自己を省察する対話がある。絵の中に「吸い込まれそう」という身体的に相手の表象世界に入る対話、作家に会った経験から東山の「やさしさ」が物質層を透過し背景層の心的作用に侵食するように絵を観る対話、「あの作品」が「私を励ます」という新たな<自他二重性><自我二重性>を経て<私的世界>が拡大していく対話が確認できた。その中でも、「吸い込まれそう」という「溶解体験」は深い鑑賞体験の中心に挙げられる。

以上、i) ~ iv) の体験を、生徒達は修学旅行や植樹という別な文脈で適用し、異なる見方や感じ方の他者と対話することで、深い鑑賞は意識化され生活まで降りたといえる。村上による一連の実践は、体験を省察し適用するコルブの学習の深化とも適合すると言ってよい。こうした対話を通して、東山絵画を貫く主題である「風景と自己のつながりに目覚めた充足感」の本質的理解に迫る鑑賞が成立したと考えられた。

第4章では、「精神的同質性」を形成する対話の実際の様相について彫刻家安藤榮作と高校生との交流実践から以下の内容が明らかになった。

作家による斧のリズムなどを同型的に写しながら素材と向かい合い、作り変える楽しさという作家と同質の追創作体験。クマンバチの出現という想定外の出来事を経て、固定的な枠組みは揺さぶられ、作家の背景IV層である「未知の世界」に接続する対話。「斧をふるう行為」を、素材・環境との一回限りの接触と、その連続を通した作品の生成過程として体験した。

美術の世界から遠い生徒も、素材や環境を通じて作家と関わり「精神的同質性」を形成しながら、有用性の秩序とは別の作家の意味世界と接続し、安藤の本質的主题に繋がる<ことば>が敷き写されたのである。

青年期に重要な本来の鑑賞とは、作品の背景に接続する体験であろう。思春期はノエマ的自己の成熟と、ノエシス的自己の発現に伴う「自己同一の危機」の時期である。絵の中に「吸い込まれる」ような体験は、ノエシス的自己が対象と同化する主客未分の言語化し難い体験である。この言語的未分化の世界を他者と伝え合う対話は、別個の身体という物質層を越えた互いの「ノエシス性」への接続であり、自らの「ノエシス性」を自覚する経験でもある。その自覚こそが<私的世界>をつくり変えるといえる。